
ふたりのマリー

宇治崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりのマリー

【Nコード】

N0322J

【作者名】

宇治崎

【あらすじ】

麻里衣マリエの手紙から全ては始まる。マリーのいる小学校へと転校してきた麻里衣。二人は見た目も違い性格も違うけれど、マリーは何故か今まで姉妹であったかのような愛情を示す。戸惑いもあった麻里衣だが自然と受け入れ良い友人関係を築いていく。その当時の思い出と現在の想いを今は傍に居ないマリーへ、麻里衣は手紙を送り続ける……。

1. プロローグ「一通目」

いつも繰り返し見聞きすることでも、何故だか殆どは忘れてしま
うの。

学校帰りの道にある花壇で、沢山咲いている紫色の、小さいブド
ウみたいな花……。一見するとラベンダーの様で違う。

春に毎年咲くのに、その存在がふと気になった時、名前を思い出せ
なかった。去年までは確かに覚えていたはずなのに。

そよ風が吹き、甘い香り。視線を花壇から移すと、大きな木に白
い小さな花が沢山咲いていました。強い風に乗る、香りが花弁と一
緒にひらりとこちらへ……。やっぱり名前は分からないけれども、懐
かしくて何となく切なくなる。貴女の姿が浮かび上がるからよ。

同年年だったのに、いつの間にか記憶の中の貴女は成長すること
を止めてしまったわ。私よりも年下になってしまったのよ。何だか
変な感じね。

ごめんなさい。教えてもらった花の名前は、時間が経つにつれて
忘れていってしまうの。大切な記憶のはずなのに、そんな自分が憎
い。

でもね、貴女がここにいたというのは確かで、声も顔も姿も薄れ
ることなく覚えているから、私だってここにいて、確かに存在して
いる。だからお願い、逢いたい。また逢いたい。

いつか、記憶の中の貴女まで消えていきそうで怖いから。
それだけは絶対にありえないことなのに、それでも恐怖してしま
う。

私と同じ気持ちよね？ 貴女も。

それでは、お返事を待っています。
貴女の麻里衣より。

2・不思議ね

生徒である、子ども達の話し声が騒がしい教室。担任教師の女は、いつもの様にゆっくりと引き戸を開けた。静まる様子に自分の威厳を感じ、密かにほくそ笑むのが日課であるためワザとゆっくりなのだ。

教室へ入るなり黒板の方を向き、神経質そうに大きさの揃った字を、チョークで書き連ねていく。いつもの担任はすぐに教壇の前に立ち、朝の挨拶をするのだが、今日は転校生を教室の外に待たせているので自己紹介の場を与えてはいけないのだ。

生徒たちも、少しだけいつもとは違う様子に首をかしげ、書かれる文字を見て納得しザワめく。

白井麻里依（しらい まりい）。

そう名前を書き、チョークを静かに置いた。季節は春。ちょうど転校生が来る時期であると言っても良い。

「白井さん、入ってきなさい」

担任が声を上げるなり、ゆっくりと戸を引く音。こちらは緊張からだ。歩みも遅く俯いた顔は熱を持って真っ赤である。担任の横に立ち顔を上げて背筋を伸ばした。

「初めまして、白井麻里衣しらい まりいです。よろしくお願いします！」

麻里衣は精一杯の愛らしい笑顔を振りまき、お辞儀をした。少し白い肌の色に肩まで伸ばし真っ直ぐな黒髪、小柄で痩せ型、笑顔は少女らしい可愛さを持ち合わせていたから、すぐに教室は拍手に包まれる。可愛い転校生は好印象だった。

「今日から四年三組の仲間になりますので、皆さん仲良くしてあげてね」

担任は生徒達に”お決まり”を呼びかけ、麻里衣に座席の指示を

した。温かく迎え入れられたことに麻里衣は一安心で、窓側の後ろから二番めの席に着きくなり、近くの子達と軽い挨拶を交わす。

「よろしくね」

最後に一番後ろの席の、前髪を真ん中で分けて、ピンクのヘアピンで留めている額を出した女の子に挨拶をするが、無視されてしまった。

麻里衣はあからさまに、その様な態度をとられたことが今まで無かったのと、転校生である不安から、少なからずショックを受けるも仕方がないと受け流す。

女の子の態度はある理由があった。麻里衣も後に知ることになるが今はまだ知らない。

授業が始まる前の休み時間。麻里衣の席の周りには沢山の生徒達が集まり、質問攻めであった。新しい家を建てたので、住むために引っ越してきたというように、初めての転校であった麻里衣にとっては、中心人物になること自体も初めてのことで、目まぐるしく慣れないでいたが、悪いことでもないと感じていたので、その日の休み時間は質問に答え続けるのであった。

「マリイちゃんよろしくね。あたし牧井^{まきい}香織^{かおり}」

興味本位で皆集まるのだが、その中で初めに友達になろうと手を差し出し伸べたのは、日に焼けた肌に、少しこげ茶色の髪を二つ結びにした元気の良さそうな女の子だった。

「よろしくねカオリちゃん！」

麻里衣はやつと安心できたよう気がし、すぐに香織と仲良くなった。その頃には殆どの生徒達の興味は別なものに移っていて、席に集まっていた人ばかりは無くなっていたからだ。

「カオリでいいよ」

「じゃあわたしのことは、マリーって気軽に呼んで！」

麻里衣の名前は”マリー”という名前の響きが好きだった彼女のお父さんが、そう読めて違和感が無い名前であるようにと付けたので、自身もお洒落で気に入っており、前の学校の友達も”まりい”と区切るよりも、読みやすく可愛いマリーと呼んでいたのだ。

だがその瞬間、香織の表情に陰りができた。麻里衣にはその訳が分からず不安そうに小首をかしげる。

「マリーちゃん、あのね……マリーとは呼べない」

香織は人目を気にするようにしながら、小さな声で訳を話始めた。それは不安そうであった麻里衣を、そのどん底に落とすようなもので、どうしたら良いか分からず泣かせたのであった。

麻里衣のためを思つてのことであつたが、泣かせてしまつて戸惑つた香織は慰める言葉をかけるも通用しなかつた。

生徒たちは転校生が泣き出したことに取りあえず慰めの言葉をかけた。

マリー・ヴェルニー。

その日は体調を崩していて、学校へ来ていなかったがクラスの中心人物であり、フランス人とのハーフで西洋人形みたいに可愛いというも……ただし、いじめっ子なのだ。

今はいじめられたことにより学校を休んでいる、”まり”という名前の子は、マリーと名前が似ているという、それだけを理由に酷いことをされていたらしい。

麻里衣が挨拶した時に無視をした子は、マリーとても仲が良い子であつた。まりよりも名前が似ている麻里衣は勿論ターゲットになつてしまったみたいだ。

香織はそれを良く思つていないと言い、助けしてくれると言つた。心強くは感じるも、いきなりの難題である。

次の日はとにかく憂鬱であった。お母さんにまだ慣れない道だからと、早めに家を出されてしまったので、わざとゆっくりと歩く。

空は青く澄み渡り、春の暖かい風が心地よく吹いていたが、麻里衣の心を慰めるにはささやかで響かない。

ため息を漏らしながら重い足取りを進め、何気なく空を見上げた。「何を見ているの？」

後ろから声をかけられた麻里衣は、思わず後ろに仰け反りそうになりながらも振り向いた。そこにはくすくす笑いをする女の子が居た。

その姿に初めは息を呑む、その子はたとえるならフランス人形で金色に輝くウエーブのかかった髪を腰まで伸ばし、透き通るような白い肌、空の色をそのまま映した青い瞳を持っている。白いブラウスに合わせ、上品そうな紺色のヒラヒラが多いスカートを履いていた。

麻里衣はまじまじと見つめてしまふ、こんなに綺麗な子は見たことが無いというように。

「もしかして、貴女がマリイちゃん？」

目をパチクリさせていると「ごめんなさい、違ったかしら」とまたクスクス笑い。

麻里衣もはつと我に返る。どうして自分の名前を……？ など野暮なことを聞く必要もない。

「……うん」

昨日のことが思い出されながらも頷いてしまった。彼女がマリイ・ヴェルニーであるかすぐに分かり視線を逸らし俯く。彼女みたいな容姿の子は身近に何人もいないだろうから。

それに自分のことは友達から聞き、からかいに来たのかと思い至り、その場を離れようとした。

だがマリーの反応は、そんな麻里衣の考えを覆すようなものであった。

「本当に？ 逢いたかった、マリイちゃん!!」

マリーはそんな様子には気づいていない様で、感激の声を上げるなり麻里衣に抱き、強く抱き締めたのだ。それから、身体を小刻みに震えさせているかと思えば、瞳には大粒の涙が溜まり、次から次へと溢れ出す。

麻里衣の中で大きな戸惑いが生じていた。マリーはいじめっ子で、麻里衣はターゲットになるはずだと考えて、身構えていたからだ。いくらそうで無かったとしても、この反応にはどう対処すればいいのか麻里衣は必死に考え、恐る恐る言葉を発する。

「えっと、あなたはマリー・ヴェルニーちゃん？」

自分の思い描いていた人物像と全く異なってしまったので、やっぱりマリーとは別人であり、自分を誰かと勘違いしているという答えを出してみたのだ。はつきりマリイちゃんと言われたが、白井麻里衣とは言われていないから。

「そうよ……私のこと、ちゃんと覚えてくれてたのね」

喜びに満ちた表情で応えるマリー。残念というべきか、良かったのか、間違いはなかった。

麻里衣にとっては初対面のはずだが、マリーにとってはそうではないみたいだ。やっと落ち着いたと見えるマリーは抱き締めるのを止め、麻里衣に向き直る。

「もう、私の前からいなくならないでね？」

泣きはらした顔で笑顔を浮かべる様子に、麻里衣はとりあえず「分かったよ」と言うしかなく、意味の分からないマリーの言動は戸惑から混乱に変わり、もしかしたら新手の嫌がらせかもしれないとまで考えるが、いくら考えても初めての出逢いであった。

3・二通目

輸入雑貨店の中をぶらぶらと歩いていたら、貴女によく似た西洋人形が小さなチェアに座らされていたの。

肩まで伸びたウェーブのかかった髪に、吸い込まれそうなほど澄んだ青い瞳と、触ったら冷たそうな色白の肌。それからことなく寂しそうで儚げで……。

もしかして今まで居ることを誰にも気がついてもらえなかったのから？ 小暗がりの下に、ずっといたみたいだもの。私はたまたまこの子の気配で気が付いたのだけれどね。でも、髪の色がブラウンイエローなのが残念だったわ。貴女は混じりけの無いキラキラした金色だったからよ。

今日は初めての出逢いを振り返っていたわ。私はあの時、貴女ほど綺麗な子を見たことがなかったから、ただただ見惚れてしまっていたことを思い出すの。抱き締められた時は驚いていたけれど、もしも戻れるのなら私も強く抱き返すのにと、今は思う……そうしたら、もう絶対に離しはしないのに。

それと、雑貨店のあの子は結局私の家にいるの。何か訴えかけているような様子がつい重ってしまう。もしかしたら貴女の抜け殻なのかもしれないわね、抱き締めるととても冷たいのよ。

だからそのたびに、どんなに辛くて悲しいか……貴女も私と同じ気持ちだから、この子と逢わせてくれたのかもしれないけれど、それじゃ駄目なのよ？

私はもう何処にも消えない、ここにいるのだからね？ でも、今は貴女がいなくなってしまうて、手紙を書いている時は涙が溢れ続

けて止まらないの……切なさが胸の奥から這い上がってきて心を潰し、寂しさに切り刻まれてボロボロに壊れてしまいそうになる。

この子ではなく、本物の貴女に私は逢いたい。

それでは、お返事を待っています。

貴女の麻里衣より。

追伸、貴女と交わした合った交換ノートを読み返しています。

4・寂しい

「絶対に、何か企んでいると思う」

学校にて、麻里衣は登校中の出来事を香織に話していた。昨日の話の様に、マリーが悪い子だと思えないでいるからだ。

「気をつけた方がいいよ」

その反面、神妙な面持ちでさらに釘を押す香織が、嘘をついているとも思えないでいた。

昨日のおでこを出したピンクのヘアピンの子である佐奈^{さな}と他三名の女子に囲まれ、楽しそうにお喋りに華を咲かせているマリー。そんな様子を麻里衣はチラリと横目で見ると、マリーも同じく見ていたのですねに目が合い微笑むが、それを知らない麻里衣は気まずそうに目を逸らした。

だが、初めの心配は取り越し苦労であるように、それから麻里衣の周りで何かが変わることはなかった。

マリーやその取り巻きの佐奈たちが嫌がらせなどをしてくることもなく、全くといっていい程関わることすらなかったので、一カ月が経とうとする頃にはクラスメイトという存在だけになっていた。

怯える気持ちはすっかり消えていて、香織や香織の友達たちと楽しい学校生活を送れている。ただそれは”麻里衣にとっては”ということだったが。

マリーはいつも取り巻きたちと楽しげに話す”フリ”をする側ら、寂しげな視線を向けていた。やっと「また逢えた」というのに仲良

くすることが出来ないでいたからだ。

新たな苛めのターゲットにしようという佐奈を、なだめたはいいもののマリーが恐くて我慢してるが不満に思っているのが分かるので、自分のグループに迎え入れることも出来ない。

マリーとしては、麻里衣させれば良いという考え持っていて、佐奈や他の取り巻きたちを失くしても良かった。

だがそういうことになった場合、麻里衣には絶対に知られたくない理由^{わけ}があった。

そうしているうちに他の子と仲良くなっていき、どんどんまた遠くの存在になっていく麻里衣。

「ねえねえマリー？」

やけに嬉しそうに話しかけてきた佐奈に、気だるそうな視線だけを送る。自分の気も知らない、とはいっても分かるわけが無いが、マリーにとってはどうでもよい子のことなんて気にかけてられない、能天気な様子には返事を返そうとは思えなかったのだ。

「これ、皆でしないー？」

それはいつものことでもあったので、佐奈は特に気も留めず「交換ノート」と書かれた、ラメが沢山使われていて、アメコミみたいなキャラクターの描かれたノートを、マリーの目の前に置く、交換日記とも呼ばれるそれはクラスの女子の間で流行っていたのだ。

「私はいいわ、面倒なもの」

「やつぱりー？」

佐奈は気づかれぬ様に努めている様だが、誰が見ても嬉しそうに他の取り巻きたちのもとへ小走りで行った。

マリーはこういう類のものを嫌いだ。佐奈もそれを知っている。知らせないで始めた後が怖いので聞いたただけだ。

”交換ノートね……いいかもしれないわ”

突拍子もない考えがマリーの頭の中に浮かぶ。佐奈たちの、自分

がないことで喜んでいるのはどうでも良かった。それもいつものことだからだ。今は思いついたことが嬉しくて、期待を胸に秘めていた。

5・三通目

交換ノートを始めた時のこと、覚えているかしら？ 初めて出逢った時の場所で不安げな表情を浮かべながら、ノートを持って待っていた貴女。

それをいきなり渡された私は、それは驚いたのよ。私たち、初めのうちあまり仲良くしなかったから、貴女はずっと想っていてくれたのに……。

今回のお手紙にはあの時の交換ノートを同封したわ。私はこれで見えがえすことができたのだけれど、貴女は忘れてしまいそうなんですもの。

だってね、マリーちゃん……いつかの手紙で私は、記憶の中の貴女が成長を止めてしまったと書いたのだけれど、それは貴女も同じだから、成長することを止めた私は、もう貴女の中にはいないのかもしれないと考えてしまう。

貴女の抜け殻の、あの子の服を縫ってあげている時、ドジをして針で指を刺してしまったの。

小さく膨れ上がった血のたまりは赤黒かった。ぼんやりと見つめつつも感じる痛痒さが、私の心をこの手紙が書けるまで、落ち着かせてくれた。

交換ノートの最後の部分を読むたびに心が張り裂けて、もう繋ぎ合わせるなど出来ないという、言いよつの無い恐怖に支配される。

私よりも貴女の方が何よりも怖かったでしょうけど、けれども私はここにいて、こうして貴女に手紙を送り続けている。

だから今こそ、読み返してほしいわ。そして、また逢いましょう。もう離れてしまわないように、抱き締めてあげるから。

それでは、お返事を待っています。
貴女の麻里衣より。

6・貴女が居ない

現在は大学生になった麻里衣。卒業を控えた4年生で、就職をするか大学院に進むかで悩んでいる。

普段は、勉強が疎かにならない程度でアルバイトに励み、喫茶店とコンビニのアルバイトを掛け持ちしていた。

休みの日は大学の友達と遊んだりしていて、小学校の時仲の良かった香織とは、それから中学と高校も一緒であったので、現在も良く連絡を取り合う良き親友である。ただ香織は、高校卒業後就職の道を選んだ為、学生の麻里衣とはあまり時間が合わず、二人はここ二、三年は会っていないかった。

麻里衣は現在も両親と暮らしており、自宅住まいなのでそこから大学へ通っている。家に居るときは、マリーと名付けたアンティーク人形の服を繕い、海外の小説を読みながら異国の地へ思いを馳せる。同じ読書の趣味を持つ友達同士と行く大学の卒業旅行では、小説で題材になった地域に準えて旅をする予定なので、その関係の小説を順を追って読み返していた。

一通りのことを終えて寝静まる前には、マリーへ手紙を書く。マリーが麻里衣の前から消えて、約十一年。毎日手紙を綴り、次の日の朝ポストへ出す。毎回幾日か過ぎた後、その手紙は住所不定で麻里衣の元へ送り返されてくるのだが。

家に居るときは、郵便配達員のバイクの音が聞こえるとすぐに外へ出て、自宅の郵便ポストの中を見つめる。やはりそっくりそのまま送り返されてきた手紙に、いつもなら諦めのため息を吐きつつ、手に取り部屋へ持ち帰るが、今回は何を思ったのか、乱暴に手に取

るなり真二つに破いて地面へ叩き付けたのだ。

前日は雨が降っており、乾ききっていない地面には水溜りが所々出来ていて、叩き付けられた手紙は水分を含み、封筒に書かれた”マリー・ヴェルニー様へ”の文字は滲み、何が書いてあるかよく分からなくなっていた。

それを拾うことも忘れたように麻里衣は家へ入り、二階の自室へと駆け込み、ベッドへ倒れこむなり小さな子どものように、声を上げて泣き叫ぶ。

近くにある、小学生の頃から変わらずに使われている学生机の上には、以前に送り返されてきた、マリーとの交換ノートが静かに置かれていた。

泣き続けて少し落ち着いた麻里衣は、交換ノートを読み返すことにした。記憶を幼い頃へ逆戻りさせたかったのだ。

気持ちが自然と幼い頃へ戻り、マリーがいたあの頃へ意識が吸い込まれていく。

麻里衣は家へ帰るなり、すぐに部屋へ駆け込んで交換ノートを開く。最近はいつもそのような感じで、麻里衣の母は「いったい何に夢中になっているのかしら」と小首をかしげ呆れるほどだった。

佐奈達との交換ノートを断ったマリーだったが、自分は麻里衣と仲良くなる手段にそれを選んだ。お互いの気持ちが噛み合わず、初めのうち麻里衣は警戒して、意図の探る文を交換するものになってしまったが、長く続けていると悪意の無いことが解って自然と楽しみに変わっていた。

ノートのページの初めにマリーが考えた”絶対に他の人には見せ

ない”などの約束事が書かれていて、他愛も無いことだけれど秘密の共有というのは、幼い少女達の心を揺さ振り絆を深めるには十分だった。

少し思い起したところで、麻里衣は恥ずかしそうにはにかみ笑いを浮かべる。

”私の、誰よりも大切なマリイちゃん”

決まってマリイは文章の終わりにそのような一文を添えていた。麻里衣は大切そうにその部分を、指でなぞる様に撫でるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322j/>

ふたりのマリー

2011年11月13日15時36分発行